

「北海道グローバル戦略(仮称)」の策定に係る第1回有識者会議における意見等への対応

| 骨子案項目 | 発言者 | 意見等 | 対応(素案イメージ) |
|-------|----------|---|--|
| タイトル | 大津座長 | ・「グローバル」という文言であればともかく、「グローバル『戦略』』となると少し意味が分からなくなるような気がする。「グローバル」と「戦略」との間に何か文言を入れて、日本語として誰でも分かるような表現にしてはどうか。 | タイトルについては「北海道グローバル戦略」とし、サブタイトルを付け戦略の目指すところを記載。 また、本文冒頭に「策定趣旨」を記載。 |
| | 栗山部長 | ・「グローバル」という言葉は、プラス面(多様化、自由貿易、交流)とマイナス面(画一化、大国主義・帝国主義、経済優先・経済至上主義)の両方を含んでおり、言葉の意味をきちんと整理しないと、誰に対して発信するのかがぼやけてしまう。プラス面・マイナス面について、本道にどのように作用しているのかを整理する必要がある。 | |
| | 越前オブザーバー | ・「北海道グローバル戦略」は仮称となっているが、「グローバル」という文言には、本日の議論にもあったように、プラス・マイナスの要素など様々な意味合いがある。読み手によって、理解が異なる可能性があるのであれば、サブタイトルなどを付けることや、名称そのものについての検討も必要かもしれない。 | |
| 現状と課題 | 白石所長 | ・本道の魅力、強み、「北海道ならではの」ものは何かを共有したい。 | 「Ⅰ 現状」において、「北海道を取り巻く世界情勢」「北海道の現状と、今、求められているもの」「北海道のめざす姿」という形で表現。 |
| | | ・北海道は、1つの国に相当する経済力・人口・面積を有しているため、日本国内で比較するのではなく、例えば、香港やシンガポールと比較するなど、比較対象をもっと広げて考えてはどうか。海外の経済人は、「北海道でビジネスをする」という考えではなく、「世界で、または、アジアで事業を展開する場合の適地はどこか」という考えで拠点を選択している。北海道は世界において、そしてアジアにおいてどういうポジションにいるのかを意識した取組が必要。 | |
| | 張社長 | ・道内には、グローバル化の必要性を感じていない人が多い。グローバル化しないとどうなるのかという将来像を見せることによって、多少なりとも危機感を感じるのではないか。 | |
| | 小畑所長 | ・国際協力における自治体の役割はますます重要になっており、途上国からの技術研修員の受入れや草の根技術協力事業の実施を通じて、すでに道内の自治体や大学はじめ様々な団体が多くの国際貢献を行っている。この国際貢献という視点を戦略と結びつけてもらいたい。 ・国際協力に係る大きな指針として、2015年9月に国連で採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」があるが、この目標への貢献とリンクした考え方を組み込んではどうか。SDGsの17の目標と169のターゲットのうち、北海道が強みを持つものはたくさんあり、中長期的に国際貢献を北海道の文化にしていくという視点を持ってはどうかと期待している。 | |
| めざす姿 | 小畑所長 | ・めざす姿はもっとダイナミックな要素を盛り込めないだろうか。 | めざす姿を「世界がより身近となり、世界を舞台に活躍」とし、【将来の北海道のワンシーン】として、将来の姿を具体的に記載。 |
| | 張社長 | ・骨子素案のめざす姿がシンプルすぎるため、具体的なイメージが思い浮かばない。イメージがつかめるよう、もう少し書き込んだ方がよい。 | |
| | | ・20年、30年後の姿を文章だけでなく何らかの形で「見える化」し、視覚に訴えることも必要。 | |

| 骨子案項目 | 発言者 | 意見等 | 対応(素案イメージ) | |
|-------|--------------|---|---|---|
| 展開方向 | 大津座長 | <ul style="list-style-type: none"> ・骨子素案では展開方向が3つあるが、展開方向は、本道が元気になるためには何をすべきかを明らかにするものという理解。戦略は、誰が何をすればよいのかを明らかにし、読み手にとって、これは自分がやるべきことだとすぐ分かるような内容にしたらいと思う。 ・方向性Ⅰは外に向けた取組、Ⅱは道内での取組、Ⅲはグローバル化の理解を深める、という整理。ⅠとⅡにおいて、官、民、道民と実施主体別に何が出来るかを整理してはどうか。 | <p>めざす姿の実現に向けて、「世界に売り込む」「世界とつながる」「世界と向き合う」という3つの視点に立ち、それぞれの展開方向を「北海道の魅力や強みを活かした海外展開」「世界と北海道をつなぐ環境づくり」「北海道の内なるグローバル化に向けて」とした上で、展開方向毎に、背景、方向性、取組主体、取組イメージを記載。</p> | |
| | 小畑所長 | <ul style="list-style-type: none"> ・各出席者から発言があったとおり、道民は内向きがちで謙虚すぎるところもあるので、戦略は、道民を引っ張るようなリーダーシップを持った内容にしてはどうか。 | | |
| | 栗山部長 | <ul style="list-style-type: none"> ・戦略を策定する上で、「国と道」、道の中の「官と民」、さらに民の中の「企業と市民」の役割を分けて考える必要がある。既存の国際化推進指針と海外との経済交流推進方策は、企業目線となっていると思う。 ・Ⅰ・ⅡとⅢは同列になるものではないと思う。ⅠとⅡは、プラス面とマイナス面を整理し、それぞれの主体がどう取り組んでいくかの方向性となる。Ⅲは、グローバル化に向け何をするのか具体的な施策について触れるのであれば、盛り込む意味はあると思うが、骨子素案の「Ⅱ 現状と課題」の「1 本道を取り巻く国際情勢」の中で整理してはどうか。 | | |
| | 白石所長 | <ul style="list-style-type: none"> ・戦略の策定に当たっては、誰が何のために何をするか、実施主体の役割分担を明確にする必要がある。 ・戦略では、本道が活性化するための目的と手段を明確にかつ具体的にする必要はある。 | | |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・対日投資については、例えば、地方で閉鎖する店舗を外国資本によって再建してもらおうというように、外資の資本、技術を取り込んで、地方を創生するというような視点も必要なのではないか。 ・外国企業の誘致は、展開方向ⅠなのかⅡなのか。いずれにせよ、本道にイノベーションを起こす意味でも必要なことであり、戦略に盛り込んでほしい。 | | <p>海外の成長力を取り込むという観点から、展開方向Ⅰ(1)「北海道ブランドの確立と戦略的活用」に含まれるものとして整理。</p> |
| | | 張社長 | | |
| | 白石所長 | <ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生とはどういう社会なのか、分かりやすく説明してはどうか。 | | |
| | 越前 オブザーバー | <ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生という言葉が現れてから、既に長い年月が経過し、在留外国人の数も増加してきている。これまでの外国人に対する支援という観点から、外国人の存在を当たり前と捉え、彼らの持つ力や多様性を活かす対応が必要。 ・本道は外国人の散住地域。また、技能実習生が地場産業を支えている地域や冬期間の長期滞在者が多いニセコ地区など、在留形態も多様で地域特有の課題もある。特に、技能実習生が在留資格別で高い割合を占める本道においては、彼らが地域社会に馴染めるような取組を進めることが、多文化共生社会の実現に向けた重要なポイントの一つ。 ・今後、コミュニケーション対策をはじめ、医療や教育、労働や防災など多くの対策が必要であるが、人口減少が進む中、「外国人の力を借りて地域の活力を維持する」といった住民意識の醸成も必要。道内に外国人が数多く住んでいることは良いことだという意識を、皆で共有できるかが課題。 | | |

| 骨子案項目 | 発言者 | 意見等 | 対応(素案イメージ) |
|-------|---|---|---|
| 展開方向 | 大津座長 | ・教育の現場で若い人達と接しているが、彼らが今後の北海道を担っていくためには、どのような環境づくりをすればよいのか。人材が一番の鍵であるので、どのような人を育てて、道内各地域で活動してもらえばよいのか、この辺を考えていかなければならない。 | 展開方向Ⅱ(2)「人材・技術を活用した交流の促進」において整理。 |
| | 小畑所長 | ・世界に貢献する人材を育成するためには、国際理解教育の充実が必要。語学だけでなく、発信できる得意ワザとユーモア感覚を持ち合わせ、北海道をよく知り上手く発信できる能力も大切。 | |
| | | 「グローバルな課題に対応できる人材の育成と明るく元気かつ地道に取り組むという考え方」が必要。 | |
| | 白石所長 | ・長期的な視点でグローバル人材を育成することも必要。 | |
| | | ・直近、道内も人手不足ということであるが、人材の道外への流出防止、道への呼び込みも重要。 | |
| | 張社長 | ・高度外国人材の活用について、日本国内のローカル人材がしっかりしていないと、海外の人材を上手く活用することができないため、ローカル人材もきちんと育成しなければならない。 | |
| 白石所長 | ・海外との経済の動きは、人、モノ、お金に加えて、EC(イーコマース:電子商取引)が活発になりつつある。このような既存の法律や制度を超えた事象にどう対処するか、考えていかなければいけない。 | 展開方向Ⅲ(2)「多様なリスクへの的確な対応」において整理。 | |
| 施策の推進 | 白石所長 | ・世界情勢は混沌としており、目まぐるしく変化しているため、5年スパンの戦略に縛られると動きが取れなくなってしまう。きちんと情報を収集して柔軟に対応できる仕組みが必要。 | 推進期間は平成37年度までとし、平成33年度(総合計画の中間年)を目処に見直しを行うほか、本道を取り巻く世界情勢の変化を踏まえ、適宜見直しをする予定。 |
| | 張社長 | ・戦略の策定後、どのように道民に周知するか工夫が必要。 | HP、報道機関への周知依頼など通常の周知方法のほか、出前講座の実施など、あらゆる機会を通じて周知を図るべく、今後検討。 |
| | 栗山部長 | ・戦略の策定に当たっては、全国初・世界初といった先例となるような心意気で具体的な事例づくりを目指す必要がある。例えば、道内観光の二次交通の問題について考えると、道央から道東・道北に観光客を送り込む場合、二次交通手段の慢性的な資金不足をどう解決するか。「ソーシャル・インパクト・ボンド(官民連携による社会的投資モデル)」のような手法を用いて、全国初となるような取組を検討してみてはどうか。 | 戦略は、グローバル化に伴うさまざまな影響を考慮し、本道が進むべき方向を広く道民の皆様方と共有するための方針であり、具体の取組については、各年度の予算検討プロセスにおいて、本戦略に示す展開方向を踏まえて整理。 |
| | 張社長 | ・グローバル化をグローバルにどうつなげていくか、北海道を強くするために「マーケット」、「人材」、「資本」、「技術」をどう活用するか検討すべき。 | |
| (その他) | 大津座長 | ・道民の誰が読んでも分かりやすいものであることが必要。 | 趣旨を踏まえ、親しみやすく、分かりやすいものとするため、図表や箇条書き等を多用して整理。 |
| | 張社長 | ・20年、30年後の姿を文章だけでなく何らかの形で「見える化」し、視覚に訴えることも必要。(再掲) | |
| | 小畑所長 | ・将来を担う若い世代の考えを活かしていくようなシニア層の意識変革も必要ではないか。戦略の策定に当たっては、全体として、読んだ人が元気が出るような内容となってほしいし、若い世代の意見を反映させることを期待。 | パブリックコメントなど通じて、多様な意見を反映させながら策定を進める予定。 |